新　刊　紹　介

1. 君主号と歴史世界
（史学会シンポジウム叢書）　佐川英治編

2. 日本のまじなひ
——古代・中世の心根にふれる——　水野正好著

3. はじめて学ぶ西洋古代史　長谷川岳男編著

佐川英治編『君主号と歴史世界』（史学会シンポジウム叢書）

山川出版社　二〇二三・一〇刊
A5　二四八頁　四二〇〇円

本書は、二〇二二年一一月、東京大学で行われた史学会大会のシンポジウム「君主号と歴史世界」が元になっている。君主号を取り上げることは、一体何を意味するのか。

そもそも有史以前から人類は、地球上、集団で生活していた。そして人が帰属すべき集団の印と並んで、集団を持続するための結束力や、ひいては統率力を体現する個人か、あるいは家系も、象徴的ではあれ伴ってきただろう。そのようなものとしてヒトは、集団間で様々に交流し、対立し、消滅してきた。その意味で、抽象的だが、君主号とは、現代を例外として、人間社会にとって有史以前からの普遍的な属性であり、人類史と不可分な標章なのかも知れない。ならば、史料に刻印される君主号を分析することは、有史以来の人類が広大無辺の空間で営んできた歴史世界を覗き見るための、格好の「小窓」なのである。

君主号の研究といえば、王権論を想起させ、文化人類学的な方法や、民俗学や、宗教社会学と関連した議論がいくつか思い付く。しかし本書所収の論文はすべて、特定の方法論をいっさい明示せず、各地域の代表的な君主号を取り上げて、その機能を歴史的世界の中に置き、緻密な解読と分析に終始した「硬・高」質の論文からなっている（おや、と、思ったのは、大津論文に、高取正男の名前が出てきた一箇所だけである）。

本書は、おもに文字資料に限定されてはいるが、多様で広大な歴史世界を垣間見るために、十一の「小窓」を用意してくれた。それは、シンポジウムの五報告と二本のコメント、企画に深く関連する四本関連する論考をさらに合わせた十一本の論考である。通読して受ける印象は、本書は単に硬質の論文集という性格に留まらない。各論文が、それぞれ独立性の強いテーマについてのモノグラフのエッセンス集でもあることである。それでいて本書のタイトルにそって足

並を揃えているのには、感心させられた。各論考により、用語が平易に、また明確に定義されて教えられるところが多く、その上、分野外のものの思い込みがしばしばひっくり返されるなど、刺激的な内容が諸処にある。

個々の論考の内容紹介は、編者佐川英治氏の、簡にして要を得た「はしがき」で尽くされている。そのために、「結論」も、「あとがき」も、必然的に不要となったのだろう。そうだとしても、本書を手にする読者のために、あえて著者と題目を、以下に書き記しておこう。

十一本の論考は、ほぼ地域毎に「東アジアの君主号」「南アジア・中央アジア・西アジア」「ヨーロッパの君主制」の三部に大分類されている。

「中国の皇帝号を中心に、草原社会・東南アジア大陸部・日本」における事例を検討する第一部「東アジアの君主号」に収められている論考は、佐川英治「皇帝が「天子」を称するとき—中華の多元化と東部ユーラシア」、杉山清彦「ハン・ハーン・皇帝—中央ユーラシアと東アジアのなかの大清君主号」、武内房司「清代シプソンパンナー王国における中国・ビルマ両属関係とその終焉」、大津透「天皇号の成立と唐風化」の四本である。

「南アジア・中央アジア・西アジア」の君主号を取り上げた第二部には、以下の三本である。小倉智史「スラトラーナ攷—神の鎧か西夷の号か」、大塚修「スルターンをこえて—セルジューク朝時代の君主号」、近藤信彰「称号はいかに生まれ、伝播するのか—バハードゥル＝ハーンをめぐって」。

第三部「ヨーロッパの君主号」は、田中創「アウグストゥスのゆくえ—ローマ帝国統治の模索」、藤波伸嘉「バシレウスからスルタンへ？—ギリシア正教徒とオスマン君主号」、中澤達哉「複合君主号「皇帝にして国王」と主権の分有—ハプスブルク・ハンガリーの選挙王制と世襲王政」、後藤はる美「君主号とブリテン革命—護国卿、あるいはオリヴァ王？」の四本構成である。全体として良く考え抜かれたテーマの選定との印象を受ける。ただあえて言えば、ユーラシア規模のロシア帝国の長大な君主号の分析があっても良かったかもしれない。

なお最後に、この企画を設定する上で一つのきっかけとなったのが、二〇一九年に刊行された岡本隆司『君主号の世界史』（新潮新書）であることも（佐川氏の言）、一言添えておく。

（石井規衛）

水野正好著

『日本のまじなひ——古代・中世の心根にふれる——』

高志書院　二〇二二・四刊
A5　二二〇頁　二五〇〇円

本書は故水野正好氏の数多い論考の中から、古代・中世のまじなひに関する比較的平易なものを取り上げ、水野氏と所縁の深い狭川真一氏と江浦洋氏が一書にまとめられたものである。本書を通読すると、平易な論考をまとめられたとは言うものの、そこに描かれる古代・中世の人々の精神世界が手に取るように感じられる構成となっている。以下、紙幅の都合ですべてを詳述することは叶わないが、簡単に内容を紹介することとで責を果たしたい。

冒頭に「序　まじなひの世界・事始」を配し、本書で取り上げる日本のまじなひについての概要を詳述する。続く「Ⅰ　まじなひ入門」では古代から中世にかけての様々なまじなひについての論考が七本収められている。「古代の祭礼と儀礼」では、都城や地方の遺跡で出土する人形や人面墨書土器、馬の埋葬遺構などを取り上げ、仏教や神道とは異なる道教、陰陽道の影響を受けた祭礼・儀礼であることを指摘する。「漢礼　道教的世界の受容」では、中国の道教がそのまま日本に伝わったわけではなく、いわゆる「道教的世界」を独自に古代日本の律令国家が受容したとし、そうした思想に基づく世界観を「漢礼」と表現し、検証することを提唱する。続く「古代の笑ひに」では縄文時代の土面や埴輪、伎楽面の表情に注目し、笑ひの表現の背景にある人々の精神世界を浮かび上がらせる。「戯画」と「人面墨書土器」の二つの論考では、土器に描かれた人面や祭り、宴といった面は、描いた人々の心性を反映したものであるとし、祈りの背後にあるまじなひの世界を考察する。「古代のまじなひ世界」では、刀剣の銘文から刀剣の持つまじなひの意味について検討し、それが中国や朝鮮から伝えられた道教的世界観に基づく祭儀や呪儀であるとし、さらに出産、日常生活における招福、呪詛の際に行う呪儀についても、考古資料を駆使しながら日本独自の道教的世界観に基づくものであると論じる。「中世　まじなひ世界の語りかけ」では、日本の中世社会におけるまじなひの様相を、時間や空間の節目、鬼の働きに注目することで、中世社会のまじなひは、異常と正常の輪廻、正常へ働きかける異常の強さにその本質があるとする。

「Ⅱ　呪符と呪儀」では、一部では今も我々の身近にあるまじなひの世界に関する六本の論考が収められている。「触穢札と神事札と」は、穢れ場を封じて結界し、穢れの拡大を防ぐ触穢札と、聖性を獲得する場を封じて結界し、穢れを絶ち、対構造にある仏事を禁ずる神事札は、結界して内なる穢れを封ずる手法と、内なる聖性を守護する手法といった手段の相違はあるものの、対構造をなすものであり、古代から中世にかけての人々の穢れと聖性に対する心根の中で軌を一にしながら成立したものであるとする。続く「鬼神と人とその動き」では、呪符や呪法書に見える鬼に注目し、鬼に対する中世・近世の人々の意識を読み解く。「蘇民将来札とその世界」では、発掘調査で出土した蘇民将来札を出発点に、蘇民将来をめぐる牛頭天王などとの関わりの展開過程を、他の考古資料や現存する民俗事例なども活用し跡付けた。「屋敷と家屋のまじなひに」では、中世社会において屋敷や宅地を建てる際の祭祀を、地鎮などその建設の段階ごとに検討した。「墳墓鎮祭呪儀の成立と展開」では、墳墓造営に際しての地鎮や鎮壇の祭儀について、日韓両国の事例を比較検討し、そのまじなひの世界観が共通ものであることを明らかにした。最後の「城とまじなひ」では、論考発表時は等閑視されていた中世の城郭や戦乱時のまじなひの実態を復元し、その意味を明らかにした。

以上が本書の内容である。列島の各地で行われている古代の集落・官衙遺跡や中世の屋敷地・城館の発掘調査でも、著者が提唱したまじなひの世界に関わる遺物が続々

と見つかっており、本書で示された視角によって意義付けが行われている事例も多い。本書は、古代中世の考古資料だけではなく、中世や近世の文献資料、あるいは文字のない時代の考古遺物まで博捜し、時代や空間を自在に行き来しながら日本人の心根の背景にあるまじなひの世界に迫ってきた著者の思考の過程を理解するにはうってつけである。物質資料から人間の精神世界を明らかにしようとした著者の研究は、今なおその価値は色あせていない。ぜひ多くの方に一読をお薦めしたい。（垣中健志）

長谷川岳男編著

『はじめて学ぶ西洋古代史』

ミネルヴァ書房　二〇二二・一〇刊
A5　三二八頁　三二〇〇円

「はじめに」（長谷川岳男）では、本邦における西洋古代史の受容を概観し、現代において西洋古代史を学ぶ意義を確認する。

第Ⅰ部ではギリシアを扱う。第一章「アケメネス朝ペルシア」（阿部拓児）はギリシア史の伴走者であるペルシア帝国側の視点から、東地中海の国際関係を描写する。第二章「スパルタ」（長谷川岳男）はスパルタ人自身や他者によって作られた「幻影」としてのスパルタ像に注意を促す。第三章「アテナイ」（師尾晶子）は貨幣・碑文資料を提示し、経済政策や「帝国」統治の実態を明らかにする。第四章「古代ギリシアの宗教」（斎藤貴弘）は「宗教」に相当する言葉や聖典を持たないギリシア人たちと神々との関わりを、供儀などの実践に着目して描写する。第五章「マケドニア」（澤田典子）はアレクサンドロス大王以前のマケドニア王たちが、ペルシア帝国とギリシア人たちの間で巧みに立ち回りつつ国力を発展させたことを示す。第六章「プトレマイオス朝エジプトとヘレニズム世界」（高橋亮介）はプトレマイオス朝の統治を、在地勢力との協力関係や他勢力との交流に触れながら描写する。第七章「ギリシアの連邦」（岸本廣大）は諸連邦の構造を概観し、それらが有力ポリスやマケドニアなどの領域国家と対等に渡り合う様を描写することで、ギリシア人共同体の多様性を示す。

第Ⅱ部ではローマを扱う。第八章「ローマ帝国の形成」（長谷川岳男）は市民軍を中核とし、軍事的功績を競い合ったローマ人たちが領土拡大に成功したと説明する。第九章「元首政期」（志内一興）はアウグストゥスが共和政期の官職・職権を合法的に集積し、事実上「皇帝」となり、それらを継承することで歴代皇帝たちが帝国支配を継続した様を描写する。第一〇章「属州」（長谷川敬）は属州人が多様な形でローマ化していく様子を描き出す。第十一章「ローマの経済」（池口守）は「古代経済史論争」を紹介したのち、奴隷制ラティフンディアよりも、十数名の奴隷労働を小規模自由農の季節労働で補う農園経営が主体だったことや食生活の実態を明らかにする。第十二章「ローマの社会」（樋脇博敏）は「偽ドシテウスのヘルメネウマタ」に着目し、罵詈雑言を駆使し、貧困を借金で乗り切ろうとした中下層民の生活を描写する。第十三章「ローマ帝国の衰亡と「古代末期」の気候変動」（南雲泰輔）は帝国の回復力の限界を超えた災厄であったディオクレティアヌスの疫病の長期的流行によって、中世への

移行が進んだと説明する。第十四章「ギリシア・ローマ世界のサヴァイヴァル」（長谷川岳男）はギリシア・ローマの著作がルネサンスにおいて古典化し、マキャベリ以降の政治・文化・社会などに多大な影響力を保持し続けていることを示す。

巻末に西洋古代史年表と索引を付す。

本書は最低限の知識を有する読者向けの優れた西洋古代史研究入門書であり、高大接続にも最適である。章末には文献案内も付されており、研究動向の把握に便利である。西洋文明の影響を大きく受け形成された現代日本で西洋古代史を学ぶ意義を示した好書である。

（内川勇海）

抜き刷り募集

当編集委員会では、毎年「回顧と展望」号編集のため、ひろく文献を収集しておりますが、ご承知の通り、論考の数が年々増加しており、その入手にはたいへん苦労しております。

つきましては、各雑誌、紀要、論文集等に発表された論考の抜き刷りまたはコピーを、一部ご寄贈いただきたく、お願い申し上げます。

「回顧と展望」号にむけて、各執筆者の便をはかり、編集作業の円滑を期するため、何卒ご協力下さいますよう宜しくお願い申し上げます。

なお、PDFファイルで送付していただくことも可能です。詳しくは史学会ホームページ http://www.shigakukai.or.jp/ をご覧下さい。

史学会編集委員会